

## アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

### 今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリオン 新劇場版 Q

その6

今回のテーマ

耐え難い現実 贖罪の念に耐えきれず否認する心 2

前回のおさらい

新劇場版 破 ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終わった。しかしシンジの起こした行動は、それはシンジが綾波の喪失を受け入れられず、躁的な心性によって起こしたものだと考えられる。その幸福な世界は幻想であり、その中で排出された悲哀は必ずふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体験される。

エヴァではシンジが綾波と一体になる幻想を抱いた一方で、それによって起きたニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しむことになる。またシン

ジ自身の心も、今回のエヴァ Q において、これまで排出してきた相次ぐ喪失（これは思春期の喪失の感情でもある）という心の痛み、悲哀が再び回帰し、現実には直面し、苦悩し、もがきいていくことになる。

一般的に現実には起きた苦悩や悲哀を受け入れていくには、自身の持つ愛の中にいかに収めていくかということが大切である。そのなかで徐々に「こころの痛み」を受け入れていく。

それにはシンジを取り巻く人々がシンジの思い（苦悩）を受け止めていく対象であり環境が必要不可欠である。

しかし暴走してしまったシンジはニアサードインパクトを起こし、周囲を非常に苦しめてしまった。それゆえシンジに対して彼を取り巻くヴィレの人々は怯えと憎しみ、怒りの感情を抱いている。今まで親しくしていたミサトも、アスカも怒りと猜疑心を向けており、14年の眠りから目覚めたシンジは、何が起きているのか全く掴めず、非常に戸惑い、良い対象を求めて、綾波と共に NERV に向かうも、綾波も以前のような綾波ではなく、シンジの心を受け止める（コン

テインする) 器になっておらず、綾波が全く空っぽの様な存在になっている。

誰も自分を受け止めてくれる対象がおらず、強い孤独と迫害的な思いをシンジは抱いていた様に感じられる (妄想分裂ポジションの心性)。

それ故にこれまで言われてきたシンジの存在を否定する言葉が何度も思い出される。

「何もしないで」とミサトが言う。

「あんたには関係ない」とアスカが見下ろす。

「エヴァにだけは乗らんでくださいよ」とサクラが叫ぶ。

「エヴァに乗れ」とゲンドウが言う。

「知らない」とレイが言う。

自分を守る、良い対象のなくなったシンジは周囲の言葉を全て被害的に捉え、その言葉に混乱し、苦悩しているように感じられる。

4. 渚カヲルとの関わりはシンジにどのような影響を与えたのか？

この Q では、今まで親しい存在だと感じていた葛城ミサトやアスカが、迫害対象になり、綾波すらも自分を守ってくれる良い対象にならなくなっていると  
感じているシンジは、支えを全く失い、孤独を感じていたと感じられる。そのな  
か、渚カヲルと出会い、彼はシンジをピアノの連弾に誘い出す。

カヲルが弾くピアノにぎこちない感じで入っていたシンジだが、徐々に水を  
得た魚のようにイキイキとして二人の演奏が一つになっていく。

連弾で音楽を作ることは深いコミュニケーションとも言える。

### 木村敏の「あいだ」について

人は主体と対象が互いに独立しているのではなく、(主体と対象の)「あいだ」  
という場で相互に作用し合い、新たな意味を見出す。そして私たちが対象とつな  
がり形成していると感じられる、ある種の感覚（共通感覚）  
→例えとして、音楽の合奏を木村は挙げている。

理想的な合奏では、演奏者は自分の演奏をすると同時に他者の演奏する音を  
聴きながら、演奏者自身が主体的に音楽全体の流れを作り出し、演奏者全員が主  
体的になりながら、音楽と一体となる感覚。

→ウィニコットのいう「遊び」の場や「潜在空間」と似た考えとも言える

カヲルとシンジの連弾の中でカヲルは「音が楽しい。二人ってすごいね」と言っているが、これはカヲルとシンジの「あいだ」でイキイキとした情緒交流が行われていることを意味する。

「あいだ」を作り出すことは「うまく弾く」ことではない。自身が主体的に音楽に関わることであり、それは演奏するシンジが「気持ちのいい音をだ」すことである。

ある意味、カヲルはピアノの連弾で「あいだ」を共有することで、シンジが他者と深く繋がっていることを体感させている。それは目覚めた後、これまでずっと孤独であったシンジの心の癒しとなった様に見える。

→それはシンジが現実と関わり深く知ろうとするきっかけとなる。

シンジが現実を知ること。

～妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行することの辛さ～

カヲルと関わる中でシンジは現実世界を知ろうという思いが強くなり、その

中で偶々支給されてきたシャツに鈴原トウジ書かれたタグをみて、シンジは衝撃を受ける。そして自身が長い間現実から隔絶されていたことを痛感し、怖くなり、現実に向き合おうとする覚悟を決めたと考えられる。シンジがきっかけとなって起こったものだとカヲルに静かに伝えられる。

そのことにシンジは強いショックを受け必死に否認する。

この心性は妄想分裂ポジションにあったシンジがカヲルによって受け止められる中で現実を知るが、自身が起こした攻撃性を受け止めきれず、(本来であれば、乳児で言えば、「乳房」(母親)が傷ついてしまったのではないか?という自責感や罪責感という抑うつ的な心の痛みを感じ、抑うつポジションへと向かっていく)抑うつポジションに向かわず、妄想分裂ポジションに回帰してしまっている。「罪だなんて……何もしてないよ!僕は関係ないよ!!」という言葉が、そのシンジの心を如実に表している。

カヲル「ただ、償えない罪はない。希望は残っているよ。どんな時にもね」というが、どんな辛いことでも、失望でも、喪失は受け入れられること、それは妄想

分裂ポジションから抑うつポジションに移行は必ずできることを言っている様に感じられる。

→その後冬月からシンジの母ユイ、そして綾波の真実を伝えられ、その後綾波に会うが、綾波は助けていなかったことを知り、シンジは絶望の底に突き落とされた様な感覚になったものと考えられる。

現実を受け入れられず苦悩するシンジにカヲルほどの様に関わっていったのか？

現実を受け入れられずに苦悩し続けるシンジ。そこにカヲルが現れ、シンジと一緒にエヴァに乗ることを提案する

シンジ「いやだ！エヴァなんかもう乗りたくない！綾波を助けてなかったん

だ！」

シンジは部屋の壁に頭を打ち付けた。

シンジ「エヴァに乗ったっていいことなかなかったんだ！もういやだ！何もしたくない！！」

カヲル「そうして、つらい感情の記憶ばかりをリフレインさせてもいいことは何も生まれない」

カヲルは床に転がっていた音楽プレイヤーを取り上げる。

シンジ「いいことなかないよ……渚君が見せたんじゃないか……あの真っ赤な、どうしようもない世界」

カヲル「エヴァで変わったことはエヴァで再び変えてしまえばいい」 シンジは壁に頭をもたげたまま、絞り出すような声で苦悩する。

シンジ「そんなこと言ったって、エヴァも父さんもミサトさんも、何もかも信じられないよ！」

カヲル「でも、僕は信じてほしい」

シンジ「できないよっ……ミサトさんたちが僕にこれを付けたんだ……もうエヴァには乗るなって。乗ったら死ぬって脅されて……」



シンジ「もう……エヴァなんかどうでもいいんだ……」

無言のまま、カヲルの手がそっとシンジの首に掛かる。シンジは驚いて言葉を失ってしまう。カヲルはシンジの首に巻かれていたチョーカーのロックを外して、それを自分の首へと移し替えてしまう。

カヲル「分かっている。リリンの呪いとエヴァの覚醒リスクは僕が引き受けるよ」

シンジ「渚君……」

カヲル「気にしなくていいよ。元々は僕を恐れたリリンが作ったものだからね。いずれはこうするつもりだったんだ」

カヲル「碇シンジ君。君の希望はドグマの爆心地に残る二本の槍だけだ」

音楽プレイヤーを挟んで、カヲルはシンジの隣へ腰を下ろして語る。

カヲル「それが補完計画発動のキーとなっている。僕らでその槍を手に入ればいい。そうすればネルフもフォースインパクトを起こせなくなるし、第13号機とセットで使えば、世界の修復も可能だ」

シンジ「そうだね……うん、君になら出来るよ」

カヲル「君となら、だよ。エヴァ第13号機はダブルエントリーシステムなんだ。

二人でリリンの希望となろう。今の君に必要なことは何よりも希望。そして贖罪

と心の余裕だからね」

(中略)

カヲル「ピアノと同じだ。二人一緒ならいいことがあるよ。シンジ君」

シンジ「行こう。カヲル君」

#### 【考察】

自分の起こしたニアサードインパクトのあまりの惨状、そのことに加え、冬月によって伝えられた綾波への真実から、より周囲に対して迫害感を感じ、カヲルとの関わりで心を開きつつあったシンジは再び自己愛的殻のなかに閉じこもってしまう。そこにカヲルが現れる。そして彼と一緒にエヴァに乗ることを提案したが、彼が「希望は残っているよ。」と言った様に、一緒に現実をみていこうと言う提案だったと考えられる。

しかしそれを聞いたシンジ（この時点では妄想分裂ポジションの心性になっている）は当初、カヲルが再び過酷な現実を直面させ、自分を再び絶望の淵に追いやるようとしていると迫害的に感じられたと考えられる。しかしシンジの DSS

チョーカーをカヲルが外したことで、シンジはカヲルに心を開き、エヴァに乗ることを決意したものと考えられる。そしてシンジは一転してカヲルを強く盲信してしまう。

前回の放送で、「DDS チョーカーはシンジの超自我の象徴であり、それをカヲルが外し、自分の首に付け替えたということは、強い超自我に伴う苦悩は引き受けるよ、というメッセージをシンジに送っているように感じられる。」と話したが、それと同時にカヲルの何か胡散臭さが非常に気になった。

それはなにかカヲルがシンジの苦悩や絶望を受け止め、シンジが現実を受け入れ、自身が起こしてしまった罪を償い、自身の主体性を確立していくという抑うつポジションに進んでいくのを見守るのではなく、カヲル自身が抱えている方向にシンジを導かせており、洗脳の様になってしまう。

そのためにカヲルは DSS チョーカーを外し、シンジの苦しみの一部を引き受けたが、しかしシンジの心は妄想分裂ポジションにとどまったままであり、シンジはカヲルを理想化し、カヲルと一体化し、苦痛に満ちた状況を否認する形になっており、ある種これは躁的防衛となっている。(クラインは理想化が躁的ポジションに本質的なものであると述べている。)

そのあとカヲルとシンジがエヴァンゲリオン第13号機に乗った後の会話が特徴的である。

シンジ「僕らだけじゃないんだ……」

カヲル「マークナインの事かい？ 援護のためだよ。ヴィレの動きを警戒しているのさ」

シンジ「そんなの、僕らだけで十分だよ」——『綾波じゃないのに』

綾波「綾波じゃ、ない？」

### 【考察】

なにかシンジはカヲルを良い対象と捉え、その結びつきが強くし他者（ここでは初期ロットの綾波）を排除しようとする心性になっている。それは妄想分裂ポジションの心性であり、今後の展開がカヲルの意図とは異なった形

## 5) 槍を抜くことに躊躇してしまうカヲルにシンジはどの様に感じたのか

シンジと一緒にエヴァ 13号機に乗ったカヲルだが、リリスの軀に刺さっている

槍の形状が変化していることに気がつき、作戦実行を躊躇う。

そこでのシーン

カヲル「ちょっと待って、変だ」

カヲルは顎に手を当てて何かを考えている。

シンジ「どうしたのカヲル君？」

カヲル「おかしい、二本とも形状が変化して揃っている」

しかし、シンジは先を急ごうとする。

シンジ「早く槍を抜こうよ。そのためにエヴァに乗ってきたんだから……」

突然、背後で爆発が起きる。爆発で生じた衝撃で13号機がよろめく。

シンジ「うわっ！」

シンジ「なんだよこれ!？」

襲来してきた機体は赤く、シンジは意外な相手の襲来に気付く。

シンジ「改2号機！アスカ！？」

改2号機は度重なる攻撃をエヴァ13号機に対して行い、どうにかATフィールドで弾き返す。

シンジ「何すんだよ！アスカ！」

アスカ「バカシンジ！あんたまさかエヴァに乗ってんの！？」

シンジ「そうだよ、エヴァに乗って、世界を変えるんだ！」

アスカ「ガキが……だったら乗るな！！」

(省略)

シンジ「なんで邪魔するんだアスカ！あれは僕たちの希望の槍なんだよ！？」

アスカ「あんたこそ！余計なこと！するんじゃないわよ！ガキシンジ！またサードインパクトを起こすつもり！？」

シンジ「違う！槍があれば、全部やり直せる。世界が救えるんだ！」

アスカ「……ホントにガキね。…分からず屋！」

(省略)

カヲル「やめようシンジ君。嫌な予感がする」

シンジ「駄目だよカヲル君！何のためにここまで来たんだよ！」

カヲル「もういいんだ。あれは僕らの槍じゃない」

シンジ「僕らの槍じゃないって……槍が必要だって君が言ったんだ。だから僕は、エヴァに乗ったんだよ！」

13号機は、リリスの大きな体によじ上って槍に近づいていた。シンジは、カヲルの言うことを聞かず、カヲルと繋がっていた機能を断ち切り、独断で目的を果たそうとする。

シンジ「操作系が！」

エヴァの目の光が赤色に変わった。

シンジ「カヲル君のために、みんなのために槍を手に入れる。そうすれば世界は戻る！そうすればミサトさんだって！」

(略)

カヲル「駄目だシンジ君……！」

カヲルは蒼白した顔面でシンジを見た。

アスカ「やめろ！バカガキ！！」

シンジ「うああああああああ！！！」

シンジはリリスの体に突き刺さった大きな槍を引き抜くと、それを頭上にかざして交差させる。シンジは目的をやり遂げたことで、達成感のある表情を見せた。

### 【考察】

愛する対象を失う不安が強まれば強まるほど自我はますます対象を救おうと切望し、修復のタスクが困難であればあるほど、超自我に関連した要求がますます厳格さを帯びる（メラニー・クライン）

→自身で犯した罪や苦悩を受け入れられず、カヲルやアスカの制止を全く聞き入れず、槍を抜いてしまう。それは自身の贖罪の念に耐えきれず、シンジは妄想



分裂ポジションから抑うつポジションへの移行ができなくなってしまう。そのために妄想分裂ポジションを強化させ、ふたたび周囲を迫害的に捉え、自己愛的殻に閉じこもり、自分しか信じられなくなってしまう。そしてシンジは槍を抜くこと（奇跡を起こそうとすること）ばかりに固執してしまい、それが世界を救う唯一の方法だと信じ込んでしまう。それは万能的な存在（万能空想）になることで、苦しみから逃れようとする心性（躁的防衛）の様に感じられる。これは「破」最後の綾波を助け出すシーンで見られたような、喪失に伴う抑うつの感情を自身で受け止めきれず、犯してしまった過ちとなんら変わらず、反復強迫の様にも感じられる。

つまり、シンジはこの時点では、カヲルが提示した「今、大切なこと、何よりも希望。そして贖罪と心の余裕」という思いを歪んだ形で受け止めてしまったのではないだろうか。そして二本の槍の形状の変化（歪み）というものが、そのシンジの認識の歪みの象徴である様にも感じられる。